



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『新続古今集』入集歌の本歌取について
Author(s)	佐々木, 朝子
Citation	国語国文研究, 145, 54-68
Issue Date	2014-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93166
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_145_54-68.pdf



『新統古今集』入集歌の本歌取について

佐々木 朝 子

一、はじめに

飛鳥井家は、武家との関わりを背景に家祖雅経以来家勢を伸長し、雅世は最後の勅撰和歌集『新統古今集』の単独撰者となるに至った。しかし、歌道の流派としては、中世における勅撰和歌集の編纂をほぼ独占してきた二条派と同一視されることも多い。例えば雅世の同時代人正徹は、飛鳥井家の歌論や歌字について「雅経は定家の門弟たりしほどに、代々みな二条家の門弟の分也。公宴などにて、懷紙を三行五字にかゝる計ぞ、雅経の家のかはりめにてあれ、其外は何にてもたゞ二条家と同者也」(『正徹物語』¹)と述べた。また、歌風に關しても、本居宣長は『新統古今集』について「(勅撰和歌集の撰者が二条家から飛鳥井家の人になり)ここに至りて歌道のあり様又一変せり。されども歌の風体はさのみ変はらず。悪しくもなく二条家の正風のままだにあり」(『排蘆小船』²)と、温雅な歌風で知られる二条派と差異がないことを指摘する。

その飛鳥井家の編纂になる『新統古今集』については、更に二条派の影響が強く考えられている。既に三条西実澄が「末の集におもしろきハ、新統古今。この時、堯孝異見せし。撰者、飛鳥井雅世」(『二根集』³)と述べ、当時の二条派の中心人物で、撰集の開闢となった常光院堯孝が編纂に助力したことを重要視している。現代においても、小川剛生氏が飛鳥井家の蔵書、歌学への見識の貧弱さ、勅撰和歌集編纂時の状況から、実質的に編纂を主導する実力があつたのは開闢の堯孝だとしている⁽⁴⁾。

しかし、伊地知鐵男氏が古い歌人の入集の多さについて「いかに当代にしかるべき歌人がすくなかつたかが理解できよう。しかも新古今時代と二条家流の歌人が多いことは、本集(撰者)が、新古今的な風尚を志向しながらも、当時十四、五世紀の秀句好みと平淡でなだらかな傾向の歌風に彩られているかが推測される」⁽⁵⁾と述べ、稲田利徳氏も「新古今歌人を比較的優遇するごとく、華麗な歌も多い反面、頓阿流の平明で、やや類型的な歌も多い。換言すれば、古歌の表現によりかかった歌と清新な表現歌を同時につつみこんで

いる」⁽⁶⁾と指摘するように、新古今歌人詠の優遇が根拠となつて、本集には華やかな新古今風を敬遠した二条派とは多少異なつた志向が見いだされてきた。また、飛鳥井家は二条派に比べて「やや用語が自由で、優麗な境地を重んじた」(『和歌大辞典』井上宗雄「飛鳥井家」といわれ、わずかに異なる面が指摘される。ただし、これらの見解は結論のみが示されており、具体的な検証はなされていない。

伊地知氏らの先行研究からは可能性として新古今風の影響を考へることができ、本論ではより大きな問題として、先行和歌の影響を考へることとし、特に本歌取に注目する。『新統古今集』入集歌の本歌取の状況を検証することで、先行研究で指摘される、本集と二条派の傾向との違いを、実態に即して明らかにしたい。

二、二条派の本歌取

和歌に関する飛鳥井家の人の述作が増え始めるのは、雅世の息雅親あたりからのことで、『新統古今集』編纂以前の飛鳥井家の歌論書は少ない。それに対して、二条派には既に多くの歌論書や聞書の類が存在している。そこで、まずは二条派の本歌取についての説を確かめてみたい。『新統古今集』編纂時の二条派の歌論として第一に参照しなければならないものは、やはり開闔亮孝やその曾祖父にあたる頼阿の歌論だろう。頼阿の著作、『愚問賢注』(『井蛙抄』)には本歌取についての歌論が残る。両者にはわずかな相違も見られるが、亮孝は本歌について述べる際に『愚問賢注』を引用するため、本論では主に『愚問賢注』⁽⁸⁾を参照する。

『愚問賢注』のなかで、頼阿は本歌取の技法を次のように分類する。

一、つねにとるやうは、本哥の詞をあらぬものにとりなして上下にをけり。

醍醐太政大臣

ちる花のわすれがたみのみねの雲そをだにのこせ春の山かぜ

本哥、

あかでこそ思はむ中のはなれなめそをだにのちのわすれがたみに

一、本哥の心をととりて風情をかへたる哥。

さよふくるまゝにみぎはや氷らんとをざかり行しがのうらなみ

といへる本哥にて、

家隆卿

志賀のうらやとをざかりゆく浪まよりこほりていづるあり明の月

一、本哥に贈答したる跡。

心あらん人にみせばや津のくにのなにはわたりの春のけしきを

これを本哥にて、

為家卿

かすみ行なにはの春のあけほのにこゝろあれなと身をおもふかな

一、本哥の心になりかへりて、しかも本哥をへつらはずして、あたらしき心をよめる跡。

定家卿

大ぞらはむめのにほひにかすみつくもりもはてぬ春の夜

の月

本哥は、

てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月よにしく物ぞなき

「佐野のわたりの雪の夕ぐれ」もこの類也。

一、たゞ詞一をとりたる哥。さきの「わすれがたみ」の本哥にて、
俊成卿

うき身をば我だにいとふいとへたゞそをだにおなじ心と思はむ

「花のさかりを面影にして」も此類にて候。此哥、詞より案じたる歌にあらず。花のちる程まではみじ、さかりの面かげをのこして身にそへむとおもへる、めづらしくおもしろき風情を案じて、この心のよみがたきを「面かげにして」といふ本哥にてつゞけられたるなり。

右の技法を大別すると、詞一つを取る、詞を取りなして全く別の内容に転換するといった、修辭を中心としたものと、「心をととりて風情をかへたる哥」「贈答したる跡」「本哥の心になりかへりて、…あたらしき心をよめる跡」のように、本歌の内容を踏まえた上で様々な展開を見せるものとに分けられる。この分類から逆に考えると、『愚問賢注』における本歌取の歌とは、ある先行歌を想起させるような共通の修辭がある、または、一首が先行歌の内容を前提とするものということになる。本歌の内容を踏まえる方法のうち「本哥の心になりかへる」技法は、本歌の世界そのものを詠み込むものではないため、本歌を認定する場合には留意が必要だが、本歌が転換さ

れて全く別の内容になるわけではない。⁽⁹⁾ 本歌取の歌では、ある程度本歌と共通した世界が描かれると考えてよい。本論を進めるにあたって、先行歌を本歌と考えるかどうかということは大変難しい問題ではあるが、本歌の定義は右のように考えておきたい。

また、『愚問賢注』の中で、頼阿は本歌に取ることができる歌の時代の下限について次のように述べる。

本哥は後拾遺などまでの哥や、堀川院百首作者も俊頼朝臣哥など近來とることありと八雲御抄にも見え侍賦。彼百首作者も人の口にある名哥などのそれとおぼゆるをとるべきにや。

本歌とする歌の時代は、勅撰和歌集でいえば『後拾遺集』まで、作者でいえば、よく知られた歌に限つてという条件付きで『堀河百首』の作者の時代までとすることがわかる。

それでは『新統古今集』編纂に関わった堯孝は、この頼阿による本歌の基準を守っているのだろうか。次の『東野州聞書⁽¹⁰⁾』の記事では、堯孝が本歌の下限について、実例とともに語っている。

九月の比、於^二殿中^一、「等思^三兩人^二こと云題をあそばさる。御人数十五人也。飛鳥井殿親子、其外はいつもの御前衆也。

御詠

わりなしや忍ぶの浦に立けぶりこなたかなたになびく心はおそくときうらみやあらむ逢事に一夜の内を分て待とも奥のは、飛鳥井入道祐雅の也。此二首に堯孝合点申なり。「於^二殿中^一可^レ進^一上点之由、被^二仰出^一、則二通拝見申て合点申なり。初て御詠にあひ申、面目也。

雅親卿

思ひわびかたみにとへばいづかたも身の怠りの夜がれとぞなる

常光院申は、「これには合点すべかりしかども、詞花集の歌を心に持ちてよまれたり。此集時分の作者を本歌に取べからず。『後拾遺作者、堀河院百首の作者迄』と有。是さへ、人の口にあらんを本歌には取るべし」とあれば、是はあまりにさがりたる事なれば、歌がらは子細なくみえ侍れども、合点申さず」とかたり侍し。

足利義政の歌会に出席した堯孝（常光院）は、飛鳥井雅親の歌に合点しなかった。雅親歌が『詞花集』の歌を本歌としてしていると判断したため、言葉をやや変えながら『愚問賢注』の説に基づき、雅親歌の本歌が基準よりも下った時代のものだとして批判している。堯孝が頼阿の見解を守り、『堀河百首』作者よりも後の時代の歌を本歌取すべきではないと考えていたことがわかる。

これ以外にも、堯孝は『前摂政家歌合』で、三代集までを本歌とすべきだという冷泉持和に対し「又三代集の外とるべからざる事も如何、後拾遺堀河院の百首作者までも人のくちにあらん秀歌をばとりもちふべしとこそうけ給り侍れ」（『前摂政家歌合』九六番判詞¹¹）と主張した。やはり、堯孝の見解は一貫して『堀河百首』作者の時代を目安としている。

『東野州聞書』の記事に戻ると、堯孝が批判した雅親歌「思ひわびかたみにとへばいづかたも身の怠りの夜がれとぞなる」の本歌とされた『詞花集』の歌は「いづくをも夜がるゝことのわりなきに二つにわくる我が身ともがな」（巻第八・恋下・二四五・源雅定・詞書「等

恋兩人といふことをよめる」だろう。二人の恋人のどちらにも夜離れをしたくないと苦悩するという内容は珍しいものだが、そもそも歌題に制約がある（雅親歌「等思兩人」、雅定歌「等思兩人」）。修辞上では「いづかた」「いづく」、「夜がれ」「夜がるゝ」といった共通性が見えるものの、明らかに本歌とわかるほど特徴的なものとは思われない。仮に内容面から堯孝の考えを辿ってみるならば、雅親歌の初句「思ひわび」が雅定歌の「どちらの恋人に夜離れすることつらい」という内容に対応し、雅定歌の「身を二つに分ける」ことの代わりに「交互に訪ねる」と転換したということになるうか。ただし、雅親歌の着想は堯孝の合点を受けた祐雅（雅世）の歌「おそくときうらみやあらむ逢事に一夜の内を分て待とも」にも近い。評価の差が分かれたのは、わずかであっても雅定歌と言葉に共通性があつたためだろう。

以上のように、雅親歌が雅定歌を本歌としているということは、一首の解釈と微かな修辞の類似によつて可能性が示される程度で、明確に読み取れるものではない。また、堯孝は「これには合点すべかりしかども」「歌がらは子細なくみえ侍れども」と、しきりに歌自体には良い評価を与えている。これを額面通りに受け取るならば、堯孝は通常なら合点すべき歌に、雅定歌を本歌とするおそれがあるために合点しなかったことになる。堯孝は一首の出来不出来に惑わされているといえよう。本歌の基準に対して、堯孝は大変厳格な姿勢で臨んでいるのである。

三、『新統古今和歌集』入集歌における堯孝の本歌 取の実際

『東野州聞書』で見たような將軍の歌会はもちろん晴の場ではあるが、勅撰和歌集の編纂は言うまでもなく歌道の最大の事業である。編纂にあたってはより良く、瑕疵のない歌を撰ぶために、通常よりも強く歌論を守ろうとするのが自然だろう。ならば、堯孝は『新統古今集』の入集歌に対して、本歌とするのは『堀河百首』の時代の歌までという基準をより厳守しようとするのではないか。入集歌からその実態を見ていきたい。

堯孝の歌は『新統古今集』に七首入集している。入集した歌は、堯孝が勅撰和歌集に入集させる自らの歌として納得していたものだろう。また、⁽¹⁾稲田利徳氏は『新統古今集』の読み人しらず歌の詠者を特定しているが、その一部を堯孝との関係によって入集が叶ったものと考えている。これらの歌は、歌の撰定に堯孝の影響があったとはいえないが、関連する周辺の歌として参考になるだろう。堯孝歌と、堯孝の関与が考えられる歌は次の十一首である。便宜のため、私に堯孝歌にはアルファベットを、堯孝周辺の歌にはローマ数字を付し、稲田氏によって特定された詠者を付け加えた。

左大臣よませ侍し新玉津島社三十首歌に、夕落花を

A鳥は今ねぐらをしむる梢にも花はとまらぬ春風ぞ吹く

(巻第一・春歌下・一六八)

後小松院にて、人々題をさぐりて五十首歌つかうまつりし

時、朝夏月といふことを

B月もなほ残るみぎりの朝清め夏さへ霜を払ふとぞみる

(巻第三・夏歌・三二一)

百首歌たてまつりしとき、野月

Cふけにけり置きそふ露も玉だれのこすの大野の夜半の月影

(巻第四・秋歌上・四七二)

百首歌たてまつりし時、浅雪

D降る程も浅茅にまじり咲く花のなびくとぞ見る今朝の初雪

(巻第六・冬歌・六八八)

左大臣よませ侍し新玉津島社三十首歌に、羈旅

E草枕わがふる郷のほかにとほつ飛鳥の宮こ恋しも

(巻第十・羈旅・九六二)

Fわするなよさが契をかはしまにへだつる年の波はこゆとも

(巻第十二・恋歌二・一二一六)

此集おほせいだされし時、和歌所の開闢になさるゝよしう

けたまはりて、つかうまつり侍し

Gなほまもれ和歌の浦波かゝる世にあへるや道の神もうれしき

(巻第二十・神祇歌・二二三八)

釈教歌の中に

I遠からぬもとの悟の宮こどり言問ふ人のなきぞかなしき

(巻第八・釈教歌・八七五)

寄蓬窓を

II逢事もなぎさの古屋いたづらに荒れ行中は浦風ぞ吹く

(巻第十二・恋歌二・一一三六)

よみ人しらず（秦兼任）
Ⅲ昨日よりけふは数そふ涙かないやとをさがるむかし語りに

（巻第十八・雑歌中・一九五七）

よみ人しらず（円雅）

Ⅳ神風や御裳濯河の水きよみすめるを空とたれかいひけん

（巻第二十・神祇歌・二〇八六）

まず堯孝が詠んだ歌AからGについて考察する。七首のうちB、E、Gの三首には先蹤となる和歌が見つからないため、特に本歌を想定せず詠んだものと考えた。先行和歌がある歌のうち、C「ふけにけり置きそふ露も玉だれのこすの大野の夜半の月影」について、『新編日本古典文学全集』⁽¹⁴⁾は、柿本人麻呂が忍坂部皇子の挽歌として泊瀬部皇女に献じた長歌（『万葉集』巻第二・一九四）を参考歌に挙げる。確かに人麻呂歌には「玉垂之 越能大野之 旦露尔 玉裳者 渥打 夕霧尔 衣者沾而」という箇所があり、これは歌枕「こすの大野」に「玉だれの」という枕詞を冠し、露と結び付けて詠むことの典拠となると考えられる。ただし、地名に係る枕詞と、「露が置く」ことのほかにCと関連するところは見られず、共通点は歌枕として⁽¹⁵⁾の表象にとどまる。本歌とすることはできないだろう。

D「降る程も浅茅にまじり咲く花のなびくとぞ見る今朝の初雪」は、「浅茅にまじりさく花の」という特徴的な表現から、明らかに「古今集」「秋の野の花にまじりさく花の色にや恋ひむ逢ふよしをなみ」（巻第十一・恋歌一・四九七）を本歌としたものとわかる。本歌の「を花」を「浅茅」に変え、掛詞として特徴的な修辞を取り入れた上で、花の鮮やかさを比喩とする恋歌を、薄く降り積もった初

雪を詠む叙景歌へと巧みに転換している。

ところで、同じ『古今集』四九七番歌を本歌とする歌に、定家の「霜か雪かを花にまじり咲く花ののこりし色も昔ばかりに」（『拾遺愚草』下・冬・二四一二）がある。定家歌は、本歌での鮮やかな花の色が褪色し、霜や雪に見紛うほどに白く変わってしまったことを詠む。Dが本歌を初雪の歌として発展させたことに通じるものがあり、Dには定家歌の影響もあるのではないかと疑わせる。

しかし、『顯註密勘抄』四九七番歌の注釈で、定家はある人の意見「秋の野のさかりすぎ、心細げなる長月の霜の中にをばな許り残たるころ、りうたんのはなやかにさきいでたるを、をばなにまじりさく花とは、紫のいろのゆかりを思へるにや」を引用する。ここでは、尾花の穂の白さを強調して色鮮やかな花との対比をより強めるためか、尾花の上に置く霜という歌にはない景物が描かれる。一般に、定家の注は非常に重視されており、先の引用箇所は『両度聞書』など後世の古注にそのまま引用されることも少なくない。四九七番歌に霜を思い描くことは、定家歌だけではなく、四九七番歌の注釈によってもよく知られていたものと推察される。また、Dと定家歌とでは、本歌の四九七番歌を展開させる方法が異なり、実景が違ってくるのではないだろうか。Dで描かれた浅い初雪によって傾ぐ花は、つまるところ花に雪が被さっている状態であり、定家注を介した四九七番歌での、尾花の霜の間に花が咲くという比喩の情景に直接繋がってくる。一方の定家歌は、本歌の鮮やかな花自体が色褪せて霜や雪のように白くなったと取りなすものだ。やはり、『古今集』四九七番歌のみがDの本歌であり、定家歌を介在させる必要はない

だろう。

F「わするなよすがが契をかはしにへだつる年の波はこゆとも」は『伊勢物語』二十二段の和歌「あひ見ては心ひとつをかは島の水の流れて絶えじとぞ思ふ」を踏まえている。「交はす」と「川島」を掛詞にするという修辭上の特徴だけではなく、恋の仲を絶やすまいという内容までもが重なっており、本歌に問題はない。

堯孝歌のなかでやや問題となるのはA「鳥は今ねぐらをしむる梢にも花はとまらぬ春風ぞ吹」だろう。Aは、『和歌文学大系』・『新編日本古典文学全集』注でそれぞれ本歌・参考歌が掲出される。まず『和歌文学大系』は、『拾遺集』「花の色はあかす見るとも鶯のねぐらの枝に手なふれそも」(巻十六・雑春・一〇〇九・藤原伊尹)を本歌と指摘する。Aと伊尹歌の間には、修辭上の大きな共通点はない

ため、花を鳥がねぐらとするという内容の共通性が重要になる。しかし、堯孝と同時代の歌で、伊尹歌を本歌取したとおぼしき「かへりきてねぐらあれぬと鳴く鳥のちる花の枝に暮るる春かな」(『草根集』・一四一七)などと比べると、Aの落花が鳥のねぐらの枝の花なのかはつきりしないこともあり、本歌の「鳥のねぐらの枝が荒れる」という要素が入っていないように見える。Aとは内容面でも関連が少ないのではないか。伊尹歌をAの本歌とするには疑問が残る。

他方、『新編日本古典文学全集』は「千載集」「花は根に鳥はふるすに返なり春のとまりを知る人ぞなき」(巻第二・春歌下・一二二・崇徳院)を参考歌に挙げる。もし崇徳院歌が本歌となると、頃阿による本歌の下限に抵触するが、二首の関係はどのようなものだろうか。Aは崇徳院歌と同様に晩春の花と鳥それぞれの様子に着目する

うえ、Aが落花を「とまらぬ」という珍しい表現で詠む背景には、崇徳院歌の「春のとまり」があるように思われる。しかし、崇徳院歌での「春が過ぎて谷に帰る」がAでは「夕べにねぐらに帰る」となり、「春のとまり」が「花が留まらない」ことになるなど、崇徳院歌とAとの間には内容と修辭に少しずつずれがある。Aが崇徳院歌を本歌として踏まえたこととはいえないようだ。Aの本歌に関する結論としては、伊尹歌と崇徳院歌はどちらも本歌として扱えるものではない。Aは特定の歌を本歌と想定して詠まれた歌ではないと考える。

それでは、入集にあたって堯孝の関与が考えられた歌人の歌ではどうだろうか。結論からいえば、I、III、IVには問題がないことが明らかだ。まずI「遠からぬもとの悟の宮こり言問ふ人のなきぞかなしき」は、『伊勢物語』九段「名にし負はばいざ事問はむ宮こ鳥わが思ふ人はありやなしやと」を、言葉を取り入れながら釈教歌に転換する。『愚問賢答』にいう「本哥の詞をあらぬものにとりなして上下にをけり」という最も正統的な方法を取り、典拠にも問題のない、二条派の本歌取の歌として典型的な歌だ。

III「昨日よりけふは数そふ涙かないやとをさがるむかし語りに」には本歌がないと考えられる。「いやとをさがる」という歌語は古風な印象を与え、何らかの典拠を感じさせるが、この歌語を使った先行の和歌には「華べより雲居をさして行く雁のいやとをさがるわが身かなしも」(『古今集』巻第十五・恋歌五・八一九)「見たすにうらうら浪はよすれどもいやとほさがるあまの釣舟」(『能因法師集』六〇・詞書「つり舟をみて」)や、これらの類歌が多く、IIIとは修辭

内容ともに本歌といえるほどに重なるものはなかった。

またⅣ「神風や御裳濯河の水きよみすめるを空とたれかいひけん」も、「すめるを空とたれかいひけん」とは『日本書紀』神代上の「及其清陽者、薄靡而為天、重濁者、淹滯而為地」を本説として詠んだもので、典拠としては問題がないうえ、和歌にも他に典拠として指摘すべきものはない。問題はないだろう。

ただし、Ⅱ「逢事もなぎさの苫屋いたづらに荒れ行中は浦風ぞ吹く」には少々問題がある。本歌は『堀河百首』「あふ事はなぎさの岡にやどりしてうらがなしかる恋もするかな」(恋十首・旅恋・紀伊・一二三)だろうが、後代の歌に「とふ人もなぎさのとまやあればてあしのはそよぎ秋風ぞ吹く」(『御裳濯和歌集』巻第五・秋歌上・三五三・寂延)がある。詠者の寂延は定家と交流があり、『新勅撰集』などに入集した歌人だ。寂延歌も紀伊歌を本歌とすると考えられるが、「なぎさの苫屋」と詠むこと、また人間関係の疎遠さを風で象徴する点が、Ⅱと非常に近い。

しかし、寂延歌は『御裳濯和歌集』にのみ収録されており、他には見当たらない。『御裳濯和歌集』は主に伊勢に関連する歌人の和歌を集めたもので、伝本は全て残欠本であることなどから、広く流布したとは考えにくい私撰集だ。勅撰歌人の歌とはいっても、Ⅱの作者が寂延歌を享受していたのかは定かでない。本歌の「なぎさの岡にやどりして」に対応して、Ⅱと寂延歌が「なぎさのとまや」という特徴的な言葉を使っているのは、非常に強い共通性を持つようにも思われる。しかし、Ⅱの作者と同時代の正徹歌に「見るめさへなぎさのとま屋すみすてばあらしなかねそにほのさざ波」(『草根集』・

七三〇三)がある。「なぎさの苫屋」は寂延歌以外からの摂取も可能な歌語だ。正徹歌などが証歌となって、Ⅱの「なぎさの苫屋」が詠まれたとも考えられる。やはり、Ⅱの本歌は直接の典拠となる紀伊歌のみとしたい。

『新統古今集』入集歌のうち、堯孝と彼に関係する歌は、本歌があるものについては『万葉集』『古今集』や『伊勢物語』など、『堀河百首』以前の時代の歌が本歌と明らかにわかるものがほとんどだった。Ⅱにはやや不審があつたが、直接の本歌は『堀河百首』にあるといえよう。歌の数は少ないものの、『新統古今集』入集歌についても、堯孝は自ら主張する本歌取の範囲を順守していたことが察せられる。

四、『新統古今和歌集』中の例外

『新統古今集』が厳密に二条派の歌論に基づいて編纂されたのならば、入集歌の本歌の範囲もこの二条派の歌論に従うと考えられる。事実、入集した二千首余の歌のほとんどはそのような歌によって占められる。しかし、中には『堀河百首』の時代よりも後の歌を本歌としたと思われる歌も入集している。これらの和歌について検討していきたい。

まず、次の赤松満祐歌を例として考える。満祐は自邸で月次和歌会を行うなど旺盛な和歌活動をしていたほか、義教の月次和歌会や、勅撰和歌集編纂に伴う『永享百首』詠進の人数に加わっており、義教の側近として有力な武家歌人だった。『新統古今集』には二首の入

集を果たしている。

源満祐

まさき散る嵐の末のうき雲や外山をかけて猶時雨るらん

(巻第六・冬歌・六二一)

本歌を『堀河百首』以前の歌の中から考えるならば、満祐歌の本歌は『古今集』「深山にはあられ降るらし外山なるまさきの葛色づきにけり」(巻第二十・神遊びの歌・一〇七七)とするのが穏当と思われる。「外山」「まさき」という共通の題材があるうえに、内容面でも、『古今集』歌の「あられ」の代わりに「時雨」が詠まれ、いかにも冬らしい山の景物を思いやるといふ基本線は変わらない。ただし、二首の間に修辞上の共通点はほとんどない。また、満祐歌が『古今集』歌のみを踏まえているとすると解釈に問題が生ずる。本歌を思い起こさせるうえで「まさき」は重要であるはずだが、満祐歌の「まさき散る嵐」は、嵐によつてまさきの葉が散らされる眼前の実景なのか、あるいは実景に関わりなく「嵐」を装飾しているのか判断が付かない。一首の具体的な情景が思い描けないため、なぜ一首を「まさき散る」と始めたのか明確ではないところがあるのだ。

そこで、満祐歌の本歌としてふさわしい歌を『新古今集』から挙げたい。

藤原雅経

うつりゆく雲に嵐の声なりちるかまさ木のかづらきの山

(巻第六・冬歌・五六一)

雅経歌は、『自讃歌』にあるほか、『桐火桶』『三五記』などの歌謡書にも引用され、当時から既に有名だった。満祐歌との修辞の共通点

はないが、「嵐が雲を動かし、まさきのかづらの葉を散らす」という情景は、大きな共通点であるとともに、他の和歌でも頻出するような陳腐なものではない。影響関係を考えてもよいのではないだろうか。なにより、雅経歌を介すと満祐歌はにわかに鮮明になる。雅経歌は、雲を吹き流す嵐の音を契機として葛城山のまさきのかづらの葉が散る様を思い描くものだが、満祐歌の中でこれに近いのは「まさき散る嵐の末のうき雲」という部分だ。これらを対応させると、満祐歌の「まさき散る」は、雅経歌同様にまさきの葉が散る様を想起したものと考えられよう。満祐歌は、実景としては嵐に吹き流される雲を眺めているのだが、その光景を、まるで雅経歌で詠まれたような、まさきの葉を散らしているのであろう嵐が雲を動かしているものと見つつ、その雲は外山で時雨を降らせているのだらうと思いつている。

また、雅経歌に近い内容は満祐歌の上句に集中している。このことについては『愚問賢答』「本歌の心をとりて風情をかへたる歌」(第二節引用参照)の例、「さよふくるまゝにみぎはや氷らんとをざかり行しがのうらなみ」を本歌とする「志賀のうらやとをざかりゆく浪まよりこほりていづるあり明の月」の技法が参考になろう。この例では、本歌の「滋賀の浦の汀が凍ることで波音が遠くなつていく」という情景を上句「しがのうらや遠ざかり行波間より」に集約し、下句「こほりて出る有明の月」で本歌から新たに展開することによつて、独自の風情が生み出されている。満祐歌もこの例と同じく、雅経歌の内容を上句にまとめ、新たな「外山をめぐる時雨」という要素を下句で付け足すことで本歌を発展させたものではないか。とす

ると、満祐歌は雅経歌を介してこそ理解できるうえに、技法からも本歌取の歌として十分に典型的なものと考えうる。満祐歌は『古今集』歌だけではなく、雅経歌をも本歌とする歌と考えて差し支えないのではないだろうか。すなわち『堀河百首』より後の歌を本歌とすることになり、堯孝の歌論からははずれていることになる。

次に、貞成親王の歌を挙げる。貞成親王は、入集数こそ六首と多くはないが、編纂を下命した後花園天皇の実父にあたる。満祐同様『永享百首』出詠者となつたほか、『看聞日記』などから勅撰和歌集編纂のための資料を多く提供したことが知られる。当時の貴顕の歌人のなかで、軽んじられるべき人物ではない。

秋の歌の中に 無品親王（貞成親王）

その色とわかぬあはれも深草や竹の端山の秋の夕暮

（巻第四・秋歌上・四二五）

この歌は、やはり『新古今集』の寂蓮の歌を思い起こさせるだろう。

題しらず

さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮

（巻第四・秋歌上・三六一）

寂蓮歌は『自讃歌』の他、『詠歌大概』『桐火桶』などの歌論書にも引用され、よく知られていた歌だ。実際、『風雅集』には寂蓮歌の影響を受けたと思われる歌「あはれさもその色となき夕ぐれのをばながすゑに秋ぞうかべる」（巻第五・秋歌上・四九一・京極為兼）が入集している。ただし、『風雅集』以外の、二条家によって編纂された勅撰和歌集の中には同類の歌の入集は見られなかった。

寂蓮歌の「その色とはわからないが」といった表現で山の夕暮れ

に風情を感じるという内容に、貞成歌はあまりにも似通っている。内容面だけではなく、修辭の面でも、二首の下旬は「山の秋の夕暮」で体言止めになるという共通性を備える。貞成歌は、寂蓮歌の形をそのまま借りて、本歌の「真木たつ山」を「深草や竹の端山」に転換し、「あわれも深い」と「深草」とを掛詞として、より一首を複雑にしたものということになるだろうか。貞成歌のように、ほぼ同様の表現をしたうえ、転換した景物もそれほど本歌から離れないというのは、『愚問賢答』に示された本歌取の技法よりもはるかに単純な方法であるが、本歌取したことは明らかであろう。

貞成歌について、『新編日本古典文学全集』『和歌文学大系』は、寂蓮歌の他に家隆の歌「深草や竹のは山の夕ぎりに人こそみえねうづらなくなり」（『続古今集』巻第五・秋歌下・四八九・家隆）を参考歌として掲出している。「深草や竹のは山」という言葉の繋がりは同類の少ないものだろうが、「竹の端山」が「深草」という地名から接続する一般的なものである以上、本歌の詞を取ることと同様に扱うことはできないのではないだろうか。家隆歌は『和歌文学大系』等と同様に参考歌として考えることが妥当だろう。

最後に、撰者の飛鳥井雅世の歌から一首挙げたい。

左大臣富士見侍らむとて東に下り侍し時、おなじくまかり下りしに、宇津の山を越え侍とて、参議雅経、踏み分けし昔は夢か宇津の山とよみけることを思ひ出でて

むかしだにむかしといひし宇津の山越えてぞ忍ぶ鳶の下道

（巻第十・歸旅歌・九五二）

詞書にある飛鳥井雅経の歌「踏み分けし昔は夢か宇津の山あとも見えぬ萬の下道」(『続古今集』巻第十・羈旅歌・九一五)は「伊勢物語」九段を下敷きにする。東へ下った昔男が宇津山に至った際の、「わが入らむとする道はいと暗う細きに」という描写と、昔男が京そく、すざるなるめを見ることと思ふに」という描写と、昔男が京の人に宛てた「駿河なる宇津の山のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」という歌を踏まえた上で、それらを「踏み分けし昔」として偲んでいるのだ。

雅世歌は、詞書に雅経歌が明示されているので、雅経歌自体を踏まえたというより、詞書の内容に沿って詠まれた懐古の歌と見ることが出来る。しかし、雅世歌の「むかしだにむかしといひし」は、雅経歌が「昔は夢か」と詠むことに対応するものだろう。また、雅世歌が雅経歌と同じく第五句を「萬の下道」と結ぶあたりには、雅世が雅経歌それ自体を踏まえて自分の歌を詠んだ形跡が感じられる。やはり、雅世歌は雅経歌自体を念頭に置いて詠まれたと考えられるべきだろう。ただし、この歌について村尾誠一氏は、飛鳥井家が歌道の家となつた根拠に雅経の存在があることを意識したものと指摘している。⁽¹⁸⁾確かに『新続古今集』は、巻頭歌が撰者の父雅縁の歌であることや、雅経をはじめ飛鳥井家の人々の入集歌が多いことなど、撰者の家が顕彰されている。この雅世歌についても、明確な目的のもとに歌論を枉げて撰ばれた可能性が捨てきれない。

しかし、やはり撰者の歌は歌集全体の歌風を代表するものとして重くみるべきものだろう。本歌にあたる歌が詞書に示されているということや、歌道家としての意識など留意点はあるが、雅世は雅経

歌を本歌と疑わせるような歌を詠み、勅撰和歌集に入集までさせているという事実がある。それは第二、三節で見てきた堯孝の本歌取の下限に対する態度に比べて、ずいぶん寛容な態度だと見てよい。雅世歌をはじめ、ここで論じた三首は、数としては少ないが、二条派の本歌取の歌論からはずれており、堯孝の撰歌基準とは異なっているといえよう。

五、足利義教歌の場合

『新続古今集』の編纂を執奏した將軍足利義教の歌は、計十八首が入集した。義教は和歌を好み、五十年ほど中絶していた勅撰和歌集の編纂が始まったことには彼のリーダーシップがあつたとされている。また、撰者は義教に気兼ねして彼の側近の歌を入集させたが、義教は入集にふさわしくない人物として一部を批判したことがあつた。このことより、勅撰和歌集の編纂に能動的な関わりを持ったこと、加えて、撰者が非常に心を配っていた人物だということが知られる。従つて、撰ばれた義教の歌は最良の歌が入るよう大変に心配りされたものと考えられる。二条派の本歌の下限に従つて歌が撰ばれたのであれば、本歌に疑念を抱かせるような歌は取り除かれていようなものだが、義教の歌の中にも『堀河百首』よりのちの歌の影響が強くみられる歌がある。

百首歌たてまつりし時、浦月
月影の雪もつものり浦風に猶秋さむし住吉の松

左大臣(足利義教)

(巻第四・秋歌上・四六二)

義教歌の「住吉の松に秋の浦風が吹く」という内容からは『古今集』「住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふる沖つしらなみ」(巻第七・賀歌・三六〇・素性法師)を思わせるが、修辞上の共通点はほとんどないうえ、内容としても、素性歌の下句「こゑうちそふる沖つしらなみ」は義教歌に全く関わっていない。

むしろ義教歌の上句、「月影の雪もつもの」に先行和歌の影響がある。「雪も積もり」と「津守」とを掛詞にした歌には次の慈鎮歌があり、勅撰和歌集や主な私家集のなかではこの一例しかない。

百首歌の中に 慈鎮大僧正

けさみればゆきもつものうらなれやはままつがえのなみにつくまで

慈鎮歌を「積もる」と「津守」を掛詞にした義教歌の証歌と考えることはできる。しかし、義教歌の表現はいかにも唐突ではないだろうか。確かに月光の白さを雪や霜に例える趣向自体はよくあるものだ。ただしそれは、第三節で引用した堯孝歌B「月もなほ残るみぎりの朝清め夏さへ霜を払ふとぞみる」に見られるように、先行の和歌が大量に積み重なり、内容が複雑化してきた当代でさえ一首の中心となりうる趣向である。それを「月影の雪」一言で表した義教歌の修辞は、この時代の和歌としてはかなり圧縮された表現といえる。

この不自然さを考慮するとき、義教歌にとつての慈鎮歌は、単純な修辞の先例ではなく、義教歌の発想の前提にあるものとすべきではないか。つまり、「ゆきもつもの」という表現で津守浦の積雪の情景を詠んだ慈鎮歌が念頭にあったからこそ、義教はそれをさらに月影の雪に転換したと考えられる。慈鎮歌は『拾玉集』や『歌枕名

寄』などに他出があり、勅撰和歌集に入集していることとあわせて、歌人の間で全く知られない歌というわけではなかっただろう。義教歌の圧縮された表現は慈鎮歌が人口に膾炙していたからこそ理解を得ることができ、受け入れられたと思われる。この歌は、慈鎮歌を介して理解されるべきだろう。

さらに、義教には次の歌のように二条派では敬遠されていただろう歌語が取り入れられた歌も見られる。

百首歌たてまつりし時、寄海恋 左大臣(足利義教)

おなじくは思ふ心の奥の海を人に知らせて沈みはてなん

(巻第十四・恋歌四・一三三三)

一首の詮となる「心の奥」という歌語には、『伊勢物語』十五段の歌「しのぶ山忍びて通ふ道も哉人の心のおくも見るべく」という先蹤がある。『伊勢物語』の歌語ならば、「心の奥」は非常に多くの歌で使われていても不思議ではないが、実際にはあまり使われてはいない。これは、鴨長明『無名抄』に見られるような認識に原因があらう。

長明は、技量が伴わない歌人による、定家らの新風和歌の模倣を批判して次のように述べた。

かやうのたぐひ(技量の伴わない歌人、稿者注)は我とはえつくりたてず、人のよみすてたる詞どもを拾ひて、そのさまを学ばばかりなり。いはゆる「露さびて」「風ふけて」「心の奥」「あはれの底」「月の有明」「風の夕暮」「春の古里」など、はじめ珍しくよめる時こそあれ、二度ともなれば、念もなき言癖どもをぞわづかに学ぶめる。⁽²⁰⁾

「心の奥」は、「露さびて」などと同様に、新風和歌の表現の特徴を

備えた新奇な言葉として取り上げられている。『伊勢物語』という權威ある典拠がありながら、「心の奥」という歌語がなかなか使用されないのは、この歌語が過度の華やかさを避ける二条派の方針に触れるような言葉とされたためだろう。

それでは、義教歌の典拠は『伊勢物語』なのかといえ、そうではないようだ。『伊勢物語』を典拠とするなら当然詠みこまれるはずの「しのぶ山」など「山」が詠み込まれておらず、代わりに歌枕「奥の海」が掛詞として詠まれる。「心の奥」が「奥の海」と掛けられる例はかなり少なく、主な歌集には次の二首程度しか見当たらない。

たづね見るつらき心の奥の海よしほひの渦のいふかひもなし
定家朝臣

（『新古今集』 卷第十四・恋歌四・一三三二）

後鳥羽院御製

我がためにはつらき心の奥の海にいかなるあまのみるめかるらん

（『続後拾遺集』 卷第十一・恋歌一・七〇二）

これらの二首は相手が冷たく報われない恋を詠んでおり、内容面でも義教歌と通じるものがある。定家歌などは「心の奥」を相手の心の奥と詠むのに対して、義教歌は自分の心の奥をいうが、これは「海」に「憂し」を掛けようとした結果だろう。先例の少ない掛詞や内容の共通点から考えて、義教歌が定家歌などに近接することは疑いえない。義教歌は、一般的にあまり使用されない歌語「心の奥」を使つたうえ、修辭・内容の両面にわたって定家歌や後鳥羽院歌に非常に近いことになる。堯孝の本歌の下限の基準に対する厳格な態度を思い起こせば、入集を避けられうる歌ではないだろうか。

撰者たちが細心の注意を払っただろう義教の歌に、これまで見てきた二首のような、本歌取の歌論に抵触していると疑われかねない歌が混ざっているということは、義教歌の撰歌に堯孝が大きく関わっていれば考えられないことだ。『新統古今集』の編纂方針が、堯孝をはじめとする二条派の歌論に貫かれてはいないという可能性がある。

六、終わりに

本論では、『新統古今集』の本歌取の状況を明らかにするため、影響が指摘される二条派の歌論から本歌取に関するものに注目し、その運用について調査した。堯孝や堯孝に関わるとされる歌は、歌論通りに『堀河百首』以前の古歌を本歌としていたが、『新統古今集』の中には、『堀河百首』よりも後の時代の歌を本歌取したものや、明らかに影響を受けたとみられる歌があった。それらの二条派の歌論からはずれた歌がどのように選ばれたのかはわからないため、撰者飛鳥井雅世の影響だとは言い切れない。しかし、いくつかの留意点があるとはいえ、雅世の歌の中に『堀河百首』より後の雅経歌を本歌取した歌がある。そのような歌がある以上、『新統古今集』中に『堀河百首』以後を本歌とする歌が入るのは撰者の志向が影響したと見るべきだろう。

無論、入集歌の大半は典拠に問題が見られないため、『新統古今集』、ひいては飛鳥井家の歌風に進んで後代の歌を取り入れる傾向があったことにはならない。あくまで歌によつては許容するという程

度だったのではなからうか。それでも、堯孝が明確に本歌の下限を守り、本集でも彼とその周辺の歌では、疑わしい本歌を有する歌は注意深く取り除かれていたことからすると、やはり傾向の違いがある。飛鳥井家の歌の用語がやや自由だということは、第一節で引用した井上宗雄氏の指摘があるが、本歌取についても同様のことが考えられる。

本論では飛鳥井家編纂の『新統古今集』入集歌の典拠が、二条派の立場から見ると厳格さに欠けていることを明らかにしたが、その原因については、撰者の撰歌傾向にあるという見通しを示すに留まった。撰者、ひいては飛鳥井家の和歌の傾向がいかなるものかということは、今後の課題としたい。

注

- (1) 引用は『歌論歌学集成』第十一卷(三弥井書店 平成一三年)に拠る。
- (2) 引用は『新編日本古典文学全集 近世随想集』(小学館 平成一三年)に拠る。なお、村尾誠一氏は、現代の研究状況を『歌道の宗匠は変わったが、歌の「風体」はおおむね二条派の歌風のままで変化がない、と論定したことが、そのまま受け継がれているといってもよい』(『和歌文学大系 新統古今和歌集』解説、明治書院 平成一三年)と、宣長の指摘を受けたものとする。

- (3) 引用は『二根集 上』(昭和四九年 古典文庫 第三三五冊)

に拠る。

- (4) 小川剛生「飛鳥井家の家字と蔵書——新統古今集まで——」(『中世文学と隣接諸学五 中世の学芸と古典注釈』竹林舎 平成二三年)。
- (5) 伊地知鐵男「新統古今集」(『国文学解釈と鑑賞』第三三巻第四号 昭和三七年三月)。
- (6) 『和歌大辞典』稲田利徳「新統古今和歌集」(明治書院 昭和六三年)。
- (7) 本論第二節中に後掲の『東野州聞書』、『前摂政家歌合』判詞。
- (8) 『愚問賢注』の引用は『歌論歌学集成』第十巻(三弥井書店 平成一一年)によった。
- (9) 「本哥の心になりかへ」る躰を、久保田淳「本歌取の意味と機能」(『中世和歌史の研究』明治書院 平成五年所収)は「本歌の作者の心になりきり、しかも本歌の枠に拘束されることなく新しい美を創造する」方法とし、「おほぞらは」の例は、本歌に「可能性として内在していた美を顕現させたもの」と考えている。
- (10) 引用は『歌論歌学集成』第十二巻(三弥井書店 平成一三年)に拠る。
- (11) 引用は『新編国歌大観』に拠る。以後、和歌は『万葉集』並びに八代集を『新日本古典文学大系』から、それ以外を『新編国歌大観』から、『新統古今集』については『和歌文学大系』に拠った。ただし、私に訂正した箇所がある。また、適宜作者を注記した。

(12) 福田利徳「新統古今集」の「読人しらず歌」をめぐって」(『中

世文学研究』第二巻 昭和五一年七月)。

(13) Cで詠まれた歌枕「こすの大野」は、『井蛙抄』第三で「みゝとをき名所」として制詞に挙げられている。

中務卿親王御歌に、

このねぬるあさ露わけて玉だれのこすのおほのに秋はきにけり

民々、ことがらくみに目出候へども、猶憚候歟。

右の『井蛙抄』引用は『歌論歌学集成』第十巻(注〔8〕参照)に拠る。『歌論歌学集成』校注者の小林強氏・小林大輔氏は、補注でCが堯孝によって詠まれていることを指摘するが、Cが本集に入集したことは、頓阿の歌論との間に齟齬をきたしているように見えるためだろう。しかし、頓阿が開闢を務めた『新拾遺集』にも同じ名所が詠まれた歌が入集しているため(「いとはやも露ぞみだるる玉だれのこすのおほ野の秋の初風」、巻第四・秋歌上・三三〇・二品法親王寛尊)、堯孝は先例から問題ないと判断したものと思われる。

(14) 『新編日本古典文学全集 中世和歌集』(小学館 平成一二年)井上宗雄校注「新統古今和歌集〔抄〕」。

(15) 「こすの大野」に露が結び付けられた歌はCと人麻呂歌にのみではなく、注(13)掲出の二首(「このねぬるあさ露わけて玉だれのこすのおほのに秋はきにけり」、「いとはやも露ぞみだるる玉だれのこすのおほ野の秋の初風」など、同様の傾向にあるものも多いが、Cとの共通点はやはり歌枕としての「こす

の大野」の表象にとどまる。

(16) 『日本歌学大系』別巻五(風間書房 昭和五六年)。

(17) 引用は『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』(岩波書店 平成九年)によった。

(18) 村尾誠一「中世和歌文学史 『新統古今集』——勅撰和歌集の終焉——」(『国文学解釈と鑑賞』第七二巻第五号 平成一九年五月)。

(19) 『建内記』永享十一年六月十七日条。

(20) 引用は『歌論歌学集成』第七巻(三弥井書店 平成一八年)に拠る。

(ささき ともしこ・北海道大学大学院博士後期課程)